

戦争体験証言ビデオの教育的効果 ー小学6年生に対する NHK 戦争体験証言ビデオの授業実践からー

村上 登司文・高見 祥一*

Educational Effect of War Testimony Video:
A Study of Using the NHK War Experience Testimony Video in Sixth-grade Classes

Toshifumi MURAKAMI and Shoichi TAKAMI *

Accepted December 3, 2019

抄録：次世代の平和教育の一つとして、本研究では戦争体験の証言アーカイブスを用いた戦争体験継承の研究授業を行い、その教育効果を検証する。NHK「戦争体験証言アーカイブス」に掲載されている動画をビデオ教材として研究授業を行った。研究授業の事前・直後・事後に意識調査を行った。視聴直後には「主体的・創造的平和志向」の項目の選択数が増え、「情緒的平和志向」の選択数は減る。多くの児童が戦争を自分事としてとらえようとする教育的効果を見いだすことができた。他方、ビデオ視聴から日数が経過すると、その意識変化はほぼ消えてしまう。ビデオ視聴後に書かせた感想文について数量的評価を試みた。感想文の評価と意識調査得点との関連は見られなかった。

索引語：戦争体験証言ビデオ、平和教育、体験継承、平和教育の意識調査

Abstract: In the interest of promoting peace education for the next generation, this study conducted four classes study of passing on war experience using testimonial archives of war experience. This study was conducted using videos included in the NHK "War Experience Testimony Archives" as video teaching material. Questionnaire survey was conducted a few ten days before, on that day, and a few ten days after the class study. Immediately after viewing the video, the number of children's choices among 10 items of "subjective and creative peace orientation" increased, while the number of choices for "emotional peace orientation" decreased. Many children are regarded to treat the war as their own personal matter after viewing it. However, when a few ten days have passed since viewing the video, the immediate change in the children's orientation almost disappeared. On the other hand, we evaluated children's note of impressions written after watching the video. There was little quantitative relationship between the researcher evaluation of impressions and the orientation score.

Key Words: war experience testimony video, peace education, experience hearing, attitude survey of peace education

* 元西宮市立樋ノ口小学校

1. 研究目的

1970年代以降現在までの平和教育実践には、戦争体験者（被爆者を含む）の語りを聞くことを取り入れた実践が多くあった。だが、戦後74年以上が経過し戦争体験者数が急速に減少する中、戦争体験継承において新たな取組が求められている。近年、「次世代型平和学習」が必要と言われており、戦争第2・3世代が第4世代の子どもたちに、第2次世界大戦（アジア太平洋戦争）を伝える平和教育の実践が問われている（大石、2016、外池、2016）。

平和学習をする上で、戦争体験者の証言を聴くに勝る教育方法は無いと言われてきた。一方で、証言者の高齢化とともに「体験者の証言力」の低下が見られる。まず、①戦争体験者の人数的な縮小（被爆者、従軍経験者の生存数の縮小）がある。次に、体験者が高齢化するため、②戦争証言者の体力の低下で平和資料館の集会で証言に立てない、また証言者として出前授業が難しい¹⁾。③高齢化で体力が低下するために証言を聴かせる話す力（話者としての声量、話の論理性、話す持続力）の低下が見られる²⁾。それゆえ、近年では、戦争体験者が生存中でまだ元気な時に録画した証言記録集（HP上のアーカイブス）などを利用した平和教育の実践が、これからの有用な方法になるのではと注目されている。それでは「戦争体験継承アーカイブス」を用いた平和学習にはどのような教育効果があるのだろうか。

本研究では、平和教育の研究授業として、小学6年生に対して、アーカイブスを用いた戦争体験継承の授業を行い、その教育効果を検証する。研究対象とする小学6年生は、戦争を扱う平和教育を受け入れることができる発達段階にあると考えられる³⁾。学習教材として利用しやすいNHK「戦争体験証言アーカイブス」で掲載されている動画を用いて授業を計画し、授業の効果を検討する。研究授業の前後3回、児童に意識調査を行い、戦争体験証言のビデオ視聴の教育的効果を実証的に明らかにしようとする。また、視聴後に行う感想文についても、評価を試み意識調査結果との比較を行う。

平和学習においては、戦争体験を学んだ後に、子どもたちに感想文を書いて終わりという手法が続けられてきた。子どもたちが戦争体験を聴くことにより、「何が」子どもたちに伝えられているのであろうか。戦争体験の継承では、「戦争の事実」を学ぶとともに「平和への思い」を自分事として受け継ぐことが期待されている。平和教育による平和意識の形成は、社会心理学でいう「態度変容」に相当するものである。従来の平和教育実践に、数量的な分析を加えることで、子どもの意識面における変容を、平和教育の効果として実証的に明らかにすることができるのではないだろうか。上記の課題意識から、本研究では次の二つの仮説を立てる。

〔仮説1〕戦争体験継承の教育実践の一つとして、戦争体験継承の証言ビデオの視聴は、子どもたちの平和意識の向上に強い影響（インパクト）を及ぼすのではないだろうか。

〔仮説2〕子どもたちの平和意識調査の結果分析により、平和学習の効果を実証的に明らかにすることができるのではないだろうか。

2. 研究授業の実施方法

（1）教材ビデオの選定方法

「NHK 戦争証言アーカイブス」は、「番組」「証言」「ニュース映像」「戦時録音資料」という内容項

目に分かれている。今回の研究の目的から考えて、構成された「番組」や「ニュース映像」ではなく、「証言」を教材とするのが適当と考える（宮本，2015）。この「証言」には 1100 人以上の戦争証言が収められている⁴⁾。

収録証言のうち、〈戦場体験〉は経緯および背景に関する知識が一定程度必要な証言ばかりであり、授業対象の小学 6 年生には不適當であると考えた。また、〈原爆被爆関係〉はすでに子どもたちが行った広島修学旅行（2018.7/2 - 7/3）での学習と重複するので除外した。

〈沖縄戦〉は、子どもに出会わせたいテーマであり、その中でも対馬丸の事件は小学 6 年生児童の年齢に近い犠牲者（九州本土に疎開する児童）が多数出ているので、その証言ビデオをいくつか視聴したが、どれも採用には至らなかった。その理由は、まず、聞き取りにくいと感じられたことである。発音の明瞭さや声の質からして、子どもが聞き取るには努力を要すると思われた。また使用される語彙も小学生には難しいと感じられた。もう一つの理由は証言のメッセージ性である。証言から事実だけをくみ取り、そこに省察を加えて、自分なりの教訓を得ることができれば、証言から学ぶ学習は成立したことになる。しかし、小学 6 年生にそこまでを求めるのは困難である。証言の中に、語り手の体験した事実と、体験者からの何らかのメッセージがあれば、聞き手はそれをうけとりやすい。掲載されている対馬丸の体験者の証言には、子どもに届きやすいメッセージ性はあまり含まれていなかった。

NHK 戦争証言アーカイブスの「証言」の中に「あの人の戦争体験」として著名人が戦争体験を語るページがある。ここでは 211 名（2018 年現在）の著名人がインタビュー映像に登場している。その中から、引き揚げ体験を持つ漫画家の「ちばてつや」を選んだ。〈引き揚げ体験〉は、戦争の被害性と加害性の両面を学ぶことができる。ちばてつや（1939～）は、今の子どもたちにはよく知られているとはいえなが、作品の紹介などをすれば、子どもにも結びつけられると考えて今回の教材ビデオに選定した。

教材ビデオ：「“地獄の旅” 引き揚げ体験」ちばてつや
（NHK 戦争証言アーカイブスより 録画日 2015 年 2 月 5 日）

（2）研究授業の実施対象

研究授業の実施場所：西宮市立 H 小学校、6 年生の 4 クラスの児童
授業実施枠：「総合的な学習の時間」

H 小学校がある校区は西宮市の東部に位置する田園地帯にあり、学校の周りにも農地が広がっていたが、近年宅地化が進んで現在は 30 クラス前後の大規模校である。阪神淡路大震災では大きな被害を受けた地域であるが、それをきっかけに地域のつながりを強め、運動会も地域と学校が共催するなど、地域活動が盛んで、学校運営にも協力的である。

学校としては特に大きな課題もなく、特に大きな特色もないが、全国学力調査の結果に表れるような学力面から見ると、言語能力に課題が見られる。子どもの様子は明るく落ち着いていて、授業や行事への取り組み意欲もある。修学旅行の行き先は広島方面に定着して 20 年以上になる。毎年宿泊施設については検討し直し、日程も調整するなど、学年の子どもの実態に合わせた修学旅行をしている

が、それに伴う平和学習も、毎年検討しながら、よい点を継承し、創意を加えて実施している。

6年生は生活面でも学習面でもきちんとしていて、落ち着きのある子どもたちである。話し合い活動になるとあまり活発に意見は出ないが、その後感想を書かせるとしっかり考えた意見がたくさん出てくることが多い。人前で話すより、紙に向かって文章を書いた方が自分の思いを表現できる子どもが多い。一方、考えを深めたり、それを文章に表したりすることに苦手意識を持っている子どももいる。

広島修学旅行の事前学習では、教室での数時間の学習の後、被爆体験「伝承者」を広島から招き（2018/5/22）、平和への思いがこもった話を聞いた。修学旅行（2018/7/2－7/3）では平和公園を中心に、小グループに分かれて自分たちで計画したコースで碑めぐりとセレモニーを行い、グループごとにボランティアガイドの話を聞いて学習を深めた。子どもたちは、かなり充実した平和学習を6年の1学期に行っているといえよう。

（3）研究授業の実施

戦争体験継承の証言ビデオの視聴による研究授業の計画にあたって、まず何を、どう見せるかを検討した。戦争体験証言ビデオの教育的効果を明らかにするための授業なので、ビデオの視聴以外の学習活動はできるだけ少なくした。1授業時間（45分）の中で視聴できるビデオを用意し、できるだけ説明を省いて、子どもたちが体験証言ビデオの視聴に専念する授業を構成した。

研究授業の実施においては、「困難になってきた証言者の直のお話のかわりにビデオから学ぼう」という授業のねらいを説明した。そして、証言者であるちばてつやはかつて高名な漫画家であったことの簡単な紹介をした。また、歴史的な説明として、日本は中国大陆に出て行っていた。中国との戦争が長引き、英米とも戦争になった。原爆が落とされ、敗戦を迎えた。ソ連が攻めてきて、「満州」の日本人は行き場をなくして、引き揚げをした、という程度の説明をした〔ここまで7～8分〕。証言ビデオの視聴は、教師用タブレットパソコンを用いて教室の大画面テレビで一斉視聴した。

証言の内容は、穏やかだった旧満州での日々から語り始め、敗戦とソ連軍侵攻で日常が一変し、“地獄の旅”を語る。ようやく港にたどり着いても、引き揚げ船で力尽きる人々や帰国してもなお続くつらい日々があったことを語る。最後は若者たちへのメッセージでしめくくられる。8つのチャプターのうち、一つは省略して7場面の証言を視聴した〔ビデオ所要時間は27分32秒〕。

内容理解を助けるために、語りを文字化したテキストを配布して手元に持たせた。このテキストは、NHKアーカイブスのページからダウンロードしたものである。これには、中国大陆の地図も授業者が付けた。ビデオ視聴後、教師による補足やまとめはせず、すぐに意識調査を行った（付属資料を参照）。事前調査に続いて2度目の調査で、子どもたちは回答の要領がわかっているの、5～6分で実施、回収した。これとは別に授業終了後、その日のうちに学級活動などの時間で「感想」を書かせた。

研究授業の実施状況

小学6年生の4クラスで研究授業を実施したが、授業者（高見）は学級担任ではなく6年生全体の算数担当教員である。算数はほぼ毎日授業がある教科であり、授業者は学年担任として学年行事にも関わっているの、授業がスムーズさに欠けることはなかった。学級担任はパソコン操作を担当し、子どもと共にビデオを視聴した。4組（10/15）と2組（10/22）は村上の授業参観に合わせて1週間

間隔で同じ曜日の同じ時間に授業し、あとの1組と3組(11/19)は、時間割の都合もありほぼ1ヶ月後に授業した。

授業の進め方は、4クラスともほぼ同じである。ビデオを視聴している間、子どもには顕著な反応は見られず、淡々と画面を見ている感があった。特に興味深そうにするわけでもなく、身を乗り出すわけでもなかった。しかし、集中して聞いていたようで、証言が進んでいって、テキストが次のページになるタイミングで、多くの子が一斉にページをめくっていた。目で文字を追いながら耳で聴くのが難しい子もいたかもしれないが、多くの子にはテキストを配布したことは有効だったようだ。視聴の間、授業者から説明を加えたり強調したりすることはしていない。

今回の授業研究では、授業の①事前、②直後、③事後の3回、児童に意識調査を実施した。表1は、ビデオ視聴の研究授業の実施日と、事前、直後、事後の意識調査を実施した月日を記したものである。右端に意識調査の分析人数を示している。分析人数は、事前・直後・事後にいずれの調査票も提出した児童数である。

表1 研究授業および意識調査の実施日

クラス	①事前調査	研究授業日(時限)	②直後調査	感想文	③事後調査	授業と事後調査の期間	意識調査の分析人数
1組	10/4	(4) 11/19 [5]	授業中	授業日	12/14 [3]	25日後	29人
2組	10/4	(2) 10/22 [3]	授業中	授業日	12/13 [6]	52日後	33人
3組	10/4	(3) 11/19 [3]	授業中	授業日	12/13 [1]	24日後	34人
4組	10/4	(1) 10/15 [3]	授業中	授業日	12/13 [2]	59日後	34人
所要日数等	1日	3日	3日	3日	2日	24日～59日	130人

注：(1)～(4)は研究授業実施日の順番を示す。[] 内は時限目を示す。

クラスによって、授業実施の状況でいくつかの違いがある。初めの4組と2組は、視聴途中で画像のトラブルがあった。次のチャプターに移るときに画像が動かなくなってしまった。4組の場合は、最後のチャプター(第7場面)が動かなくなってしまう、授業者がテキストを読み上げることで代用した。また、2番目の授業以降の2組、3組、1組では、証言ビデオの進行に伴ってB4サイズの絵を黒板に掲示した。これはちばてつや自身の筆による絵画で、引き揚げを語った彼の著書からコピーしたものである(ちば, 2018)。内容理解の手助けになるようにと考えてしたが、掲示物が小さく子どもにはあまり見えなかったようである。後の3組と1組では、「満洲」について、その侵略性がよくわかるように少し詳しく説明した。これは先に行った4組と2組の感想文の中に日本人が「満州国」にいたことの意味や「満州国」における日本人と中国人との関係性が理解できていない記述がいくつも見られたので、説明の必要性があると思ったためである。

表2 意識調査の分析対象数

		クラス				合計
		1組	2組	3組	4組	
調査時期	①事前	29	33	34	34	130
	②直後	29	33	34	34	130
	③事後	29	33	34	34	130
性別	男子	14	16	18	16	64
	女子	15	17	16	18	66
計		29	33	34	34	130

注：平和意識の変化量を調べるので、3つの意識調査票のすべてに回答した130名を分析した。

3. 意識調査の分析

意識調査票の構成

研究授業の前後に、「意識調査」を実施して自分の「思っていること、考えていることに近い文」を選ばせた。調査では、子どもが授業者の意を汲むことなく、また自身の文章表現力にも左右されずに平和意識を表出できるように、番号を選択する方式にした。

平和意識調査においては、子どもたちに選択させる質問項目（文）を作成し、学習のめあての視点から3つのグループに分類した。A群が「主体的・創造的平和志向」の選択10項目。B群が「情緒的平和志向」の選択10項目。C群が「無関心・非平和的」の選択10項目、合計で30項目である（表3参照）。

A群の「主体的・創造的平和志向」の選択項目には、「世界を平和にするのは自分だ」「外国の困っている人たちをたすけたい」などと、自分の意志や行動の志向を表現する文が並ぶ。B群の「情緒的平和志向」の選択項目は、「戦争の時代に生まれなくてよかった」「戦争になってほしくない」など、あまり戦争について知らなくても自然に感じていそうな文が並ぶ。C群の「無関心・非平和的」の選択項目は、「戦争なんて自分には関係ない」「悪い国があったら、戦争をしてもしかたない」などの文が並ぶ。

A群、B群、C群の各グループに10項目の合計で30項目をシャッフルして並べ直し、1から30の文番号をつけて一枚の調査用紙に並べた（付属資料参照）。研究授業の事前、直後、事後には同一の意識調査用紙を使用した。調査用紙の冒頭に「アンケートに協力してください」とだけ記し、子どもたちがテストのように正解をさがす姿勢にならないように配慮した。また、よりよい答えをさがしたり、教師の意図を付度したりする時間的余裕がないように、回答時間を短くしてすばやく答えさせた。

(1) 選択した項目の分析

研究授業の①事前、②直後、③事後の3時点で意識調査を行った。回答結果を時系列で見ていくことにより、子どもたちの平和意識の変化を見ることができる。

選択された項目数は、 $130 \text{人} \times 3 \text{回} \times 10 \text{項目} = 3900 \text{個}$ である。表3によれば、B群の項目の選択数が2096（53.7%）で最も多い。子どもたちは「情緒的平和志向」の項目を多く選択している。A群の項目の選択数は1589（40.7%）であり、B群の4分の3の選択数である。子どもたちの「主体的・創造的平和志向」の項目も多く選択されていると言える。C群の「無関心・非平和」な項目の選択数は215（5.5%）であり、B群の10分の1とかなり少ない。

「事前調査→直後調査」の選択数の変化量を見ることで、戦争体験証言ビデオの1回の視聴による「直接効果」が示される。戦争体験証言ビデオの視聴から時間が経った時点で3度目の調査を行う。「直後調査」と「事前調査→事後調査」の変数を比較することで、ビデオ視聴の長期効果（あるいは残存効果）が示される。このように、ビデオ視聴の授業による直接効果と残存効果を比較し、戦争体験証言のビデオ教材による平和教育実践の教育効果を検討する。

表 3 グループ別にみた調査時ごとの選択項目の選択数

グループ	番号	選択項目	①事前	②直後	③事後	計	合計
A群 主体的・創造的 平和志向 (2ポイント)	29	戦争をなくしたい	95	91	98	284	1589
	2	平和な世界をつくりたい	81	92	74	247	
	11	世界を平和にしたい	68	80	69	217	
	8	世界を平和にするために自分にも出来ることある	58	64	54	176	
	17	外国の困っている人たちをたすけたい	52	65	54	171	
	20	世界の平和のために役立ちたい	43	54	45	142	
	14	世界が平和になるようにがんばりたい	46	56	39	141	
	26	平和な世界をつくる人になりたい	29	36	24	89	
	5	自分たちががんばれば世界は平和になる	29	29	26	84	
	23	世界を平和にするのは自分だ	10	17	11	38	
B群 情緒的平和 志向 (1ポイント)	1	戦争はきらいだ	104	97	102	303	2096
	18	戦争になってほしくない	95	92	98	285	
	24	世界が平和になってほしい	90	89	96	275	
	30	平和な時代に生まれてよかった	76	65	72	213	
	7	今の日本は平和でよかった	73	66	71	210	
	25	戦争で死ぬのはいやだ	63	59	65	187	
	19	食べ物が無い国の人たちはかわいそう	60	61	65	186	
	12	今は戦争がなくてよかった	60	52	63	175	
	13	戦争の時代に生まれなくてよかった	44	38	50	132	
	6	戦争の時代の人にはかわいそう	38	44	48	130	
C群 無関心・ 非平和的 (-1ポイント)	16	どこかの国が攻めてくるかもしれない	25	26	22	73	215
	3	戦争のことは考えたくない	22	8	19	49	
	15	戦争のことは知りたくない	7	4	6	17	
	9	悪い国があったら、戦争をしてもしかたない	8	3	5	16	
	10	平和について考えるより、国語や算数の勉強の方が大切だ	5	4	6	15	
	21	戦争や平和のことは、子どもにはむずかしすぎる	4	3	5	12	
	28	戦争なんて自分には関係ない	5	1	5	11	
	22	戦争は大人どうしがするから、子どもには関係ない	4	2	4	10	
	27	戦争や平和のことは、大人にまかせておけばよい	4	1	3	8	
	4	戦争をしても、勝つのならいい	2	1	1	4	
分析人数			130	130	130	390	390

注：グループごとに、選択数の「計」が多い順に選択項目を並び替えている。

表 4 調査時ごとの選択数とその変化量

番号	選択項目	調査時			変化量		
		①事前	②直後	③事後	①→②	②→③	①→③
17	外国の困っている人たちをたすけたい	52	65	54	13	-11	2
11	世界を平和にしたい	68	80	69	12	-11	1
2	平和な世界をつくりたい	81	92	74	11	-18	-7
20	世界の平和のために役立ちたい	43	54	45	11	-9	2
14	世界が平和になるようにがんばりたい	46	56	39	10	-17	-7
26	平和な世界をつくる人になりたい	29	36	24	7	-12	-5
23	世界を平和にするのは自分だ	10	17	11	7	-6	1
8	世界を平和にするために自分にも出来ることある	58	64	54	6	-10	-4
6	戦争の時代の人にはかわいそう	38	44	48	6	4	10
19	食べ物が無い国の人たちはかわいそう	60	61	65	1	4	5
16	どこかの国が攻めてくるかもしれない	25	26	22	1	-4	-3
5	自分たちががんばれば世界は平和になる	29	29	26	0	-3	-3
24	世界が平和になってほしい	90	89	96	-1	7	6
10	平和について考えるより、国語や算数の勉強の方が大切だ	5	4	6	-1	2	1
21	戦争や平和のことは、子どもにはむずかしすぎる	4	3	5	-1	2	1
4	戦争をしても、勝つのならいい	2	1	1	-1	0	-1
22	戦争は大人どうしがするから、子どもには関係ない	4	2	4	-2	2	0
18	戦争になってほしくない	95	92	98	-3	6	3
15	戦争のことは知りたくない	7	4	6	-3	2	-1
27	戦争や平和のことは、大人にまかせておけばよい	4	1	3	-3	2	-1
29	戦争をなくしたい	95	91	98	-4	7	3
25	戦争で死ぬのはいやだ	63	59	65	-4	6	2
28	戦争なんて自分には関係ない	5	1	5	-4	4	0
9	悪い国があったら、戦争をしてもしかたない	8	3	5	-5	2	-3
13	戦争の時代に生まれなくてよかった	44	38	50	-6	12	6
1	戦争はきらいだ	104	97	102	-7	5	-2
7	今の日本は平和でよかった	73	66	71	-7	5	-2
12	今は戦争がなくてよかった	60	52	63	-8	11	3
30	平和な時代に生まれてよかった	76	65	72	-11	7	-4
3	戦争のことは考えたくない	22	8	19	-14	11	-3
分析人数および変化量		130	130	130	0	0	0

注：表の選択項目は、事前調査から直後調査（①→②）の変化量が大きい項目から増減順に並び替えている。

事前調査から直後調査への変化

表 4 は、変化量「事前調査→直後調査（①→②）」が大きい順に項目を並び替えている。事前調査から直後調査への変化量を見ると、表の上部ほどプラスの変化が大きい項目である。最も大きなプラスの変化量があったのは、「外国の困っている人たちをたすけたい」(+13) である。変化量増の上位 10 項目うち、8 番目までが A 群「主体的・創造的平和志向」の項目となった。

他方、表の下部ほどマイナス変化が大きい項目である。マイナス変化が多くあったのは、B 群「情緒的平和志向」であり、変化が大きい 10 項目の内、6 項目が「情緒的平和志向」の選択項目である。この中で最も大きいのが、「平和な時代に生まれてよかった」(-11) である。C 群「無関心・非平和的」の項目については、もともと 5.5% と選択数が少なく、調査の間に大きな変化はない。唯一「戦争のことは考えたくない」(-14) が大きくマイナスに変化している。

直後調査から事後調査への変化

調査時について、直後調査から事後調査へ（研究授業から 24 ～ 59 日後）の選択の変化を見ると、選択数が増加しているのは、B 群の「情緒的平和志向」の選択項目が多い。先に見た事前調査から直後調査への変化の真逆となっている。プラスの変化の上位 10 項目うち、8 つまでが「情緒的平和志向」の項目である。最も大きいプラスの変化が、「戦争の時代に生まれなくてよかった」(+12) である。逆に、選択が減少しているのは、A 群の「主体的・創造的平和志向」の選択項目である。マイナス変化が大きい下位 8 項目が「主体的・創造的平和志向」の選択項目である。マイナス幅が最も大きかったのが、「世界が平和になるようにがんばりたい」(-17) である。

事前調査から事後調査への変化

事前調査から事後調査まで約 2 ヶ月間における選択数の変化量を見ていく。変化量がプラスと言えるのは、「戦争の時代の人はいかかわいそう」(+10), 「世界が平和になってほしい」(+6), 「戦争の時代に生まれなくてよかった」(+6), 「食べ物がない国の人たちはかわいそうだ」(+5), となった。これらはいずれも B 群（情緒的平和志向）の選択項目である。逆に、選択がマイナスなのは、「平和な世界をつくりたい」(-7), 「世界が平和になるようにがんばりたい」(-7), 「平和な世界をつくる人になりたい」(-5), となり、いずれも A 群「主体的・創造的平和志向」の選択項目である。

(2) 調査票の意識得点

つぎに、グループ別に得点化する。分析対象の児童は、平和に関して 30 項目の中から自分の「思っていること、考えていることに近い文」を 10 個選ぶように指示された。意識調査による得点は、30 の項目の中から A 群の項目を選択したときは +2 点、B 群の選択は +1、C 群の選択は -1 点と換算した（表 3 の左欄と表 5 を参照）。児童には 30 項目の内、10 項目を選択させたので、理論上は最高が +20 点 (2×10)、最低が -10 点 (-1×10) となる。

表 5 意識調査における各グループの項目の意識得点化

A 群：主体的・平和創造的	+ 2 点
B 群：情緒的平和志向	+ 1 点
C 群：無関心、非平和的	- 1 点

表6は調査時別に個人の平均得点を示している。事前調査では分析対象全クラスでは12.61点であったが、直後調査では13.68点であり、1.07ポイント上昇している。ただし、事後調査では12.63と1.05ポイント低下している。事前、直後、事後の3調査の合計では、1人当たりの平均得点は12.97点であった。

クラス（組）による違い

クラス別に調査時ごとの平和意識調査の平均得点を見ていく。10月4日の事前調査では、表6に示すように最も得点が高いのが3組で13.03点、低いのが4組で11.65点、その差は1.38ポイントである。研究授業直後に行った②直後調査では、最も高いのが1組で14.59点、低いのが4組で13.18点、その差は1.41ポイントである。③事後調査では、最も高いのが1組の13.21点、低いのが4組の11.44点で、その差は1.77ポイントである。②直後調査と③事後調査では、得点のクラス順位が同じである。

表6 調査時でみた意識調査のクラス別平均得点と変化量

組〈授業順〉	事前調査	直後調査（事前→直後）	事後調査（直後→事後）	〔事前→事後〕	全調査
1組〈4〉	12.97	14.59 (+1.62)	13.21 (-1.38)	〔+0.24〕	13.59
2組〈2〉	12.94	13.24 (+0.30)	12.82 (-0.42)	〔-0.12〕	13.00
3組〈3〉	13.03	13.82 (+0.79)	13.15 (-0.67)	〔+0.12〕	13.33
4組〈1〉	11.65	13.18 (+1.53)	11.44 (-1.74)	〔-0.21〕	12.09
平均得点	12.61	13.68 (+1.07)	12.63 (-1.05)		12.97

注：（）内は調査間の変化量を示す。〔〕内は事前調査と事後調査の間の変化量を示す。

性別による選択の違い

また性別で意識調査得点で見ると、意識得点の全体（男女合計）の平均は12.97点であった。男女別に平均得点を見ると、男子では12.83点であったが、女子では13.11点である。女子の方が0.28ポイント高くなっており、本意識調査における「平和意識」が高いと言えよう。

表7 性別にみた平均得点

	男子	女子	全調査
平均得点	12.83	13.11	12.97

つぎに、項目の選択数で男女を比べると、男子の方が選択率が高い項目は、「戦争の時代の人にはかわいそう」（男子が+13.3%）、「食べ物がない国の人たちはかわいそうだ」（+6.5）、「戦争は大人どうしがするから、子どもには関係ない」（+5.2）である。他方、女子の方が選択率が高い項目は、「世界が平和になってほしい」（女子が+13.7）、「どこかの国が攻めて来るかもしれない」（+12.2）、「世界の平和のために役立ちたい」（+8.1）、「今は戦争がなくてよかった」（+6.3）などである。

4. 授業直後に実施した感想文の分析

授業のふり返しとしての感想文によれば、「実さいに戦争を体験した方の話を聞くのは、全然無いことなので、すごく良い体験になりました。」「やはり経験された人だからこそとても苦しかった、大変だったことがよくわかりました。」「こういう話でも戦争を体験していない私達はしっかり聞くべきだと思いました。」などという記述がある。このことから、ビデオ映像とはいえ、実際に体験者から話を聞くのと同じように受け止めた子が何人もいたことがわかる。

「ちばさんの、思いを聞いて考え方が変わった」「今は戦争を体験した人が生きているのはめずらしく、あまり話を聞けないですがその話を聞いた私達がこれから生まれてくる人々に話したいです。」などという記述からは、証言ビデオの視聴によって平和に対する姿勢に影響が及ぼされたことがわかる。子どもの感想文から授業を評価すると、証言ビデオを用いたこの授業は効果的な授業だったといえるであろう。

従来の平和教育では、学んだ後に子どもが感想文を書いたらそれで平和学習は終了とする授業実践が多くあった。授業者がこの感想文を評価対象とする場合、その文章構成・表現、着眼点、独自性、思考の深浅・具体性、文章の量など、評価対象をどこに絞るかによって、評価結果はさまざまに変わるであろう。それを考慮せずに教師の主観で評価すると、教師の意をうまく汲んで表現力に富む感想が高評価を得ることになりかねない。それでは学習評価として正しい手法とはいえないし、フィードバックして授業効果を測定する役にも立たない。

授業研究において感想文の評価方法を検討した。回収した感想文は、授業実施の直後（数分後～数時間後）に、小さな用紙に端的に心情や思考を綴ったものである。書く所要時間も10数分程度である。従来の平和教育においては、子どもたちはそのような感想文を評価の対象とされたり、内容について指導を受けたりした経験はないといえよう。

提出された感想文の記述を検討すると、それに含まれる要素は大きく4種類に分けられる（表8参照）。感想文で、要素1から要素4へと記述内容が深化するほど、平和学習の達成レベルが高いと評価する。

表8 感想文の評価要素と達成レベル

評価要素	要素の内容	児童の記述例	達成レベル
要素1	説明、脱線、その他	「～を見ました」「～がありました」	レベル1
要素2	印象、感想、感情	「かわいそうだった」「すごいなあ」	レベル2
要素3	疑問、願望	「～と思う」「なってほしい」「おかしいと思う」	レベル3
要素4	決意、意志、意欲	「～しなければならない」「～していきたい」	レベル4

達成レベルが低いとする要素1は、授業に参加していたという事実報告でしかない。あるいは、授業のねらいをつかみ損ねているということを意図せずに表している場合もある。要素2は単純な感想や印象であり、ひとごとのように書かれることが多い。要素3は要素2よりも自分に近づけているが、漠然とした疑問に終わったり、ぼんやりした願望に終わったりしている。まだひとごとの感覚である。達成レベルが最も高い要素4は、深淺はあるにせよ、自分の問題としてとらえ、考えている。また、

自分の行動の目的として表明している。学習効果の観点でいうと、要素の数字が大きい方が達成レベルは高く、教育効果が表れていると考えられる。上記のように児童が書いた感想文を、4つの達成レベルに分けた。それぞれをレベル1～レベル4と名付ける。

感想文の評価と意識調査得点との関連

得点化した126人の感想文のうち、レベル1は1人もいなく、レベル2は46人(37%)、レベル3は48人(38%)、レベル4は、32人(25%)であった。

表9により、レベル4の感想を書いた32人を見ていく。直後の意識調査の得点が高い(18点以上)が、同時に感想文のレベルも高い者は3組の3人のみである。他方、直後の意識調査の得点が低い(10点未満)のに、感想文は高い者は4組に2人いる。意識調査の得点が中間値(10~17点)で、感想文のレベルは高い者が27人であった。

表9 直後得点と感想文評価レベルとの対応

1組			2組			3組			4組		
通し番号	直後得点	感想文	通し番号	直後得点	感想文	通し番号	直後得点	感想文	通し番号	直後得点	感想文
1	13	2	2	14	4	1	16	4	1	16	3
3	17	4	3	18	2	2	15	4	2	19	2
5	15	3	4	13	3	3	13	3	3	15	2
6	15	3	5	16	3	4	12	3	4	18	2
7	13	2	6	15	4	5	18	4	5	15	3
8	13	4	7	10	3	6	14	4	6	14	2
9	16	2	10	13	4	7	15	2	7	15	3
10	11	2	11	12	3	8	8	3	8	13	3
11	16	2	12	14	4	9	15	3	9	5	3
12	14	3	13	11	3	10	16	4	10	6	4
13	11	3	14	12	2	11	7	3	11	13	3
14	14	3	15	6	2	12	15	3	12	18	2
16	13	3	16	14	4	13	13	2	13	15	4
17	16	3	17	13	2	14	18	4	14	9	4
19	16	2	18	17	2	15	12	3	16	15	3
20	14	3	19	18	3	16	15	4	17	14	3
21	14	2	20	11	2	17	19	2	18	17	2
22	17	3	21	18	2	18	18	2	20	15	4
23	17	4	22	11	4	19	15	3	21	16	4
25	17	2	23	16	3	20	13	2	22	13	2
26	13	2	24	11	2	21	5	3	23	13	2
27	16	3	25	14	2	24	3	2	25	15	2
28	14	3	26	14	4	25	15	3	26	14	3
30	17	3	27	7	2	26	16	4	27	11	3
31	10	3	28	15	2	27	18	4	28	13	3
33	15	2	29	15	2	28	12	2	29	15	2
34	16	3	30	11	3	29	15	2	30	6	2
35	17	4	31	12	3	30	11	3	31	13	2
37	13	2	32	13	2	31	11	3	32	7	2
平均	14.59	2.75	34	14	4	32	17	4	33	15	4
相関係数	0.278		35	13	3	33	11	2	34	8	3
			36	9	2	34	15	4	35	12	4
			37	17	3	35	17	2	36	14	4
			平均	13.24	2.87	36	17	2	37	11	4
			相関係数	0.127		平均	13.82	3.00	平均	13.18	2.91
						相関係数	0.247		相関係数	-0.145	

つぎに、平和意識調査の得点高位のラインを16点以上に変えて32人を見ていく。直後の意識調査のポイントが高く(16点以上)感想文の達成レベルが高い者は11人となる。意識調査は低い(10点未満)が感想文は高い者は2人、意識調査は中間値(10~15点)で感想文は高い者が19人であった。

高位ラインを18点以上、あるいは16点以上のいずれにおいても、高位レベルの児童について、意識調査の成績と感想文の成績に関連性は認めにくい。

他方で、意識調査が低位の11人の感想文の達成レベルは、レベル2が4人、レベル3が5人、レベル4が2人で、平均2.8である。感想文を書いた126人の平均レベルが2.9であるから、ほぼ平均値と変わらない。意識調査の低位レベルの児童についても、感想文の評価との関連性は認めにくい。意識調査が低位で感想文も低位レベルの人数は、意識調査低位グループの半分以下である。意識調査が低位なのに感想文は高レベルという子も2人いる。各クラスの相関係数を表に示した様に低く、分析人数全体の相関係数も0.087で、相関はないと言える。

5. 戦争体験継承の証言ビデオの教材使用について

証言ビデオの視聴授業について

小学校において一般的な授業では、教師の発問があり、児童の発言があり、学習活動（ノートを書く、ワークシートに記入する、練習問題を解くなど）がある。今回の研究授業では、「戦争体験継承アーカイブス」の「証言」を用いた平和学習にはどのような効果があるのか、を考察するための授業である。そのため、この授業を構築するにあたっては、一般的な授業準備で行う、よりよい発問を考える、適切な学習活動を設定する、教材の提示の仕方をくふうするなどは、行わなかった。前出の＜研究授業の実施＞に記したように、この授業には、説明はあっても発問はない。

児童の発言もないし、学習活動は、教師の説明を聞く、ビデオを視聴する、意識調査に回答する、この3種類だけである。

研究授業は、できるだけ日常の授業に近づけるように設定した。担任以外の教師が主となって授業する、(2クラスでは)外来の見学者がある、など研究授業の特質上やむを得ない条件以外は、ふだんの授業通りにした。いつもの教室で、いつもの座席で、いつもの時間内で。教室設置テレビの大きな画面で教材を見るのは、児童にとって特別なことではない。

授業の導入と証言者(ちばてつや)の紹介をなるべく簡単にし、ビデオ視聴を主たる活動として時間確保するようにして、授業を組んだ。視聴の後、教師はそれについて何も言わず、ただ意識調査を行うのみであった。感想文は、いったん授業とは切り離して書かせている。特に感想文の内容について指示はしていないので、ビデオの感想と授業自体の感想が混在している。

この研究授業を振り返って、児童はビデオによる証言を、よく受け止めたといえると思う。これまでの授業経験では、ビデオの教材を提示すると、ややもすると児童の注意が散漫になりやすい。画面を通して一方的に流れるビデオは、意識を集中しにくいかもしれない。

しかし、この授業では、そのような児童は見られなかった。これは、テキストを配布したことの効果もあるかもしれない。授業前は、画面を見て聴くことと紙面を読むことは同時には難しいかもしれないと危惧した。しかし、聞き取りにくい言葉、音だけでは意味が取りにくい言葉もあるだろうと考えて、それを補助するためにテキストを用意した。授業をしてみて、ページをめくるタイミングがそろっていることから、児童がこのテキストを有効に利用したと思われる。ビデオ視聴という、音声と視覚による情報に文字情報をプラスすることで、内容の理解の助けになったようである。

テキストはNHK 戦争証言アーカイブスのホームページに、チャプターごとに「再生テキスト」と

して話した言葉を文字化した文章が掲載されている。これをコピーすれば、あまり手間をかけずにテキストを用意できる。

ビデオの視聴時間は、45分間という1単位時間の制約を考えて設定した。約28分間という視聴時間は、小学6年生の児童には無理のない程度であったといえそうだ。

4クラスの授業はほぼ同じ経過で行ったが、少しだけ異なる。授業は4組、2組、3組、1組の順で行った。後の3組と1組は、「満州」の説明をするとき、比較的丁寧にした。先に実施した二つのクラスの感想文を見て、日本の侵略性がうかがえるように補足する必要があると思ったためである。また、2組、3組、1組では絵を掲示した。ちばてつやの著書（ちば，2018）からコピーした、彼自身が描いた当時の絵である。感想文ではそのことに触れている児童もあったが、授業の態度は3組や1組と特に変わりはないように思える。

また4組と2組においては、どちらも再生トラブルが起きた。一つのチャプターが終わり、次にスキップするときにビデオが動かなくなってしまうのである。いろいろ操作するとまた動き出したのだが、時間は無駄だし、児童の集中は途切れてしまう。

4組の場合は、動かないまま終了時刻が近づいたので、最後のチャプターだけはビデオを諦めて、授業者がテキストを読み上げて子どもに伝えることにした。この再生トラブルは、通信速度の問題であろうが、公立小学校のネット環境を考えると、現時点では避けがたいものではないだろうか。NHK 戦争証言アーカイブスのように、ダウンロードして使うのではなくストリーミングで使う資料の場合は、いつでも起こりうるトラブルであろう。

6. まとめ

NHK 戦争証言アーカイブスの視聴による研究授業の教育的効果について明らかになったことをまとめる。調査対象の特性として、今回の研究授業は、平和教育が比較的盛んな兵庫県西宮市のH小学校で行われた。小学6年生の1学期に広島修学旅行に関連して平和学習を行った児童に対して、2学期に戦争体験証言ビデオを視聴させた。

研究授業を挟み、事前調査から2ヶ月が経過して行った事後調査では、子どもたちはほぼ変わらない選択傾向を示した。A群（主体的・創造的平和志向）よりB群（情緒的平和志向）の選択傾向が強く、C群（無関心・非平和的）な傾向は少ない。意識調査結果では、男女の得点差があり、女子の方がA群（主体的・創造的平和志向）に関連する平和意識が高い傾向が見られた。

次に仮説1と2を再掲して、検討結果をまとめる。

[仮説1] 戦争体験継承の教育実践の一つとして、戦争体験継承の証言ビデオの視聴は、子どもたちの平和意識の向上に強い影響（インパクト）を及ぼすのではないだろうか。

研究授業の直後に行った調査では、A群項目の選択が多くなる傾向が見られた。平和教育におけるビデオ視聴で、対象児童において主体的・創造的平和志向な意識が啓発されたと見え、望ましい影響があった。直後効果には、戦争を自分事ととらえ、何かしようとする平和への積極的態度の育成を促す効果である。このことから、小学6年生に対して、戦争体験継承の「証言ビデオ」を用いて平和学

習ができると言えよう。

〔仮説2〕 子どもたちの平和意識調査の結果分析により、平和学習の効果を実証的に明らかにすることができるのではないだろうか。

意識調査の結果分析によれば、研究授業の直後効果は、事後テストではほぼ消えていた。つまり、事前調査と事後調査における意識調査の結果がほぼ同じとなった。1回のビデオ視聴による意識変化（直後効果）は一過性の教育効果であるといえる。1回きりの平和学習でも教育効果が現れるが、その後に持続する意識変化になっているとは言えない。今回の1回だけの戦争体験証言ビデオの視聴では、持続効果を見いだすことはできなかった。

平和意識調査として、児童による感想文を評価するために、教師の経験知から到達レベルを想定してその基準で感想文を評価した。この感想文の達成レベルと、意識調査の得点との間に関連があるとは言えなかった（相関が見られなかった）。

本研究の課題として、平和教育の比較的熱心な学校の児童に対する研究授業においても、証言ビデオの直後調査では変化が見られ、ビデオ視聴の直接的効果が認められた。平和教育がそれほど熱心でない学校では、ビデオ視聴がどのような教育効果を示すかは明らかにしたい今後の課題である。

研究授業からの示唆として、戦争証言ビデオを教材ビデオとして用いるときは、その選択において検討すべきことが示された。子どもの発達段階を考慮に入れ、また平和学習で何を「目当て」とするかによって、証言ビデオの選択が異なる。学習目標に沿うビデオをいかに選ぶか、それを補助する情報の提供が必要となる（宮本，2016）。

戦争体験証言ビデオの教育効果を検証する方法をどうすべきかの課題がある。今回用いたアンケート調査内容は試行であり（付属資料）、今後の研究授業で使用して検討し、より有用性が高いものに改善する必要がある。証言ビデオについては、宮本聖二は「アーカイブに触れた子供たちが、いずれは戦争をだれかに伝えるとき素材として使うようになる、あるいはこのアーカイブを元に研究に取り組むようになってくれることを期待している」（宮本，2016）と述べている。さらに、平和学習における感想文の評価方法を試みたが、検討を進める必要がある。また、平和教育に評価はそもそも必要なのかの課題が残る。ただし、証言ビデオを用いた授業においては、ただビデオを見せるだけで、一定の効果があったといえる。これは今後平和学習の取り組みを広めていくために有効な知見と言えよう。

謝辞 研究授業の実施においては、H小学校の6年生担当の教員及び子どもたちに協力していただきました。本研究は、JSPS 科研費 17K04684（平成 29 年度～31 年度、基盤研究（C）「戦争体験継承に対する当事者意識を次世代に育てる教育の比較社会学的研究」）の助成を受けたものです。記して謝意を表します。

注

- 1) 沖縄県にあるひめゆり平和祈念資料館で、1989 年の開館以来続けてきた元ひめゆり学徒（証言員）

による講話が、証言員の高齢化のため 2015 年に終了した。

- 2) 話力低下への言及は、現存される戦争体験者には失礼な側面があるが、人間である以上、高齢化による肉体的な話力の低下は否めず、それへの社会的な対応が必要とされてきた。
- 3) 小学 6 年生で、社会科で日本や世界の歴史を学び、戦争についても学習しており、広島や長崎への平和修学旅行を実施する小学校が多いことから、戦争証言視聴が充分可能な発達段階にあると言える。
- 4) NHK 戦争証言アーカイブスは、2009 年 68 人で公開が始められた。2015 年末に証言者は 1100 人を超えている。2015 年には「NHK デジタルアーカイブス教育活用ガイド」が制作されている（宮本，2016，p.126）。

参考文献・資料

- 大石学監修（2018）『戦争体験を「語り」・「継ぐ」広島・長崎・沖縄』学研
- ちばてつや（2018）『ひねもすのたり日記 1』小学館
- 外池智（2016）「継承的アーカイブの活用と『次世代の平和教育』の展開－広島『平和教育プログラム』の実践－」教育実践研究支援センター『教育実践研究紀要』38
- 中條克俊（2015）「NHK「戦争証言アーカイブス」に学ぶ：戦争証言者は私たちに何を伝えたいのか」（特集 子どもたちと戦争を学ぶ）『歴史地理教育』（838），pp.4-9
- 福山琢磨編（1988～2017）『孫たちへの証言』新風書房，第 1 集～第 30 集
- 平和教育部会（2016）「平和教育実態調査 2015 の報告－これからの平和教育」，兵庫教育文化研究所『子どもと教育』153
- 宮本聖二（2016）「デジタル・アーカイブによる学び：戦争体験の伝承と語りの継承」『情報プロフェッショナルシンポジウム予稿集』2016，pp.121-126
- 村上登司文（2018）「戦争体験を第 4 世代（次世代）に語り継ぐ平和教育の考察」『広島平和科学』40，pp.33-50
- 村上登司文（2018）「戦争体験継承への当事者意識を育てる教育の考察」『京都教育大学教育実践研究紀要』18，pp.173-182

「NHK 戦争証言アーカイブス」URL: <https://www.nhk.or.jp/archives/shogenarchives/> （2019.10.30 閲覧）

